

修学院離宮御写真及実測図例言

- 一、本書は 宮内省の御許可を得て、昭和四年十二月より同六年一月まで数十次、修学院離宮に参進して撮影実測したる所なり。
- 一、本書姉妹篇として、仙洞御所、桂離宮及二條離宮の三部あり、以て京都離宮の全豹に渉るものとす。
- 一、工学士大岡實君は実測製図に、また加藤収二君は製図に、孰れも尠からぬ助力を與へられたり、記して感謝の意を表す。
- 一、執拗なる努力を続けて今漸く本書成る、聊か学界を益する所あらば幸甚矣。

修学院離宮御写真及実測図目次

解説

- | | | | | | | |
|---|-------|-----|----|---|---|---------------------------|
| 一 | 上の御茶屋 | 鄰雲亭 | 西側 | 四 | 同 | 洗詩台 |
| 二 | 同 | 同 | 同 | 五 | 同 | 鄰雲亭山寺燈籠 |
| | | | | | | 亭の北端にありて雄瀧に対し幽邃の景趣最も勝れたり。 |
| | | | | 六 | 同 | 鄰雲亭三帖より洗詩台を見る |
| | | | | | | 亭の南端より一ノ間六帖及洗詩台を見たる所なり、欄 |
| | | | | | | 間花菱の透し甚だ優麗なり |
| 三 | 上の御茶屋 | 鄰雲亭 | 南側 | 七 | 同 | 上御茶屋鄰雲亭平面。 |
- 御門を入りて石を踏むこと十数階、鄰雲亭に至るべし。
創建の亭舎は延宝年間山火に焼亡し、現存するものは其旧礎の上に再建せられたるもの、図は下段より仰写したるもの及び斜写したるものにして共に其清楚なる結構を見るべし。
皇御手植の楓樹なり。

八 同 東立面〔図〕
 九 同 南立面〔図〕
 一〇 同 西南隅
 一一 同 鄰雲亭より御苑を見る
 鄰雲亭は御苑東南隅高所にあるを以て御苑の縦観に適せり。浴龍池の名ある御池を見通して遙かに千歳橋、御舟屋等を見るを得べし、規模の雄大思ふべきなり。
 一二 同 御苑 瀧
 鄰雲亭の東北にありて、高さ二十五尺ばかり、下段瀧壺は近年の補修に係る。
 一三 同 御苑 千歳橋 全観
 鄰雲亭を下りて池畔を行くに千歳橋の眺め甚だ奇にして楼船の浮べるが如し。
 一四 同 窮邃軒 西北面
 一五 同 同 南面
 一六 同 同 南側
 一七 同 同 東面
 窮邃軒は御苑中央高所にありて全園の景趣を一眸に集む西北面は全部覆戸を掛けて風雨に備へ、南面には後水尾天皇宸翰の御銘額を掲げ、東面には御水屋水張口を設く。
 一八 上の御茶屋 窮邃軒 水屋
 袋棚の戸は編みたる竹を張り柿色に塗りたる組子にて之れを押へ風雅を極めたり。水張口の内簀の子、上部袋棚は白張の襖なり。

一九 中ノ御茶屋客殿 平面 〔図〕
 二〇 同 同 東立面 〔図〕
 二一 同 同 西立面 〔図〕
 二二 同 同 南立面 〔図〕
 二三 同 同 北立面 〔図〕
 二四 同 同 東西断面 〔図〕
 二五 同 同 南北断面 〔図〕
 二六 同 同 千歳橋東側
 二七 同 同 千歳橋内部
 二八 同 同 千歳橋西側
 二九 上の御茶屋 御苑 中島 御腰掛背面
 三〇 同 同 側面
 三一 同 同 中島御腰掛 〔図〕
 中島御腰掛は茶弁当又は茶箱の御興ありしやと推さる、所謂茶箱点前にふさへる御腰掛として記録すべきものと信じ別に測図をも添えたり。
 三二 同 御庭 紅葉橋
 窮邃の御茶屋より北に下れば土橋あり、其右方紅葉谷の称あり秋季紅葉最も勝れたり、図は紅葉谷より土橋を見たるものなり。
 三三 同 御苑 止々齋趾及御舟屋
 土橋より止々齋趾を見る、老松御舟屋を覆ひてなかなかの風情なり。逆に止々齋趾より土橋を見るに葛屋形の燈籠池汀にたちて止々齋の在りし日を伝へ翠色水に

映えて一幅の図画をなせり。

三五 上の御茶屋 御苑 水盤及石燈籠（右瀧見、左山寺）

止々齋趾に朝鮮石の大水盤あり、雄瀧に近く瀧見燈籠あり、鄰雲亭の東に山寺燈籠あり。

解説

三六 中の御茶屋配置〔図〕

三七 同 正門

三八 同 客殿 西側遠望

白沙をふみ石階を上りて正門に至る、莊嚴のうちに典雅の趣あり、御門を入りて右方広芝の一端より見れば、中央の殿宇は客殿にして其左方低く松樹の間に壁の見ゆるは楽只軒なり。

三九 同 客殿 南正面

四〇 同 同 西側面

四一 同 同 西側及楽只軒前苑

四二 同 同 北側

四三 同 同

四四 同 同 東南隅軒

客殿は東福門院御化粧の間を移築せられたるものと称せらる。もと林丘寺の客殿たりしを明治十八年奉還する所なり。この客殿と地盤を異にして低部に楽只軒あり、客殿西側面は其前苑より見たる所なり。北側は世に網干形の称ある高欄あり。松樹のあたりに唐椿の銘木ありしも今枯れて存せず。東側は林丘寺に接し、石を積み階を造りて其上に門あり。林丘寺に通ず。

四五 同 客殿平面 〔図〕

四六 中の御茶屋客殿南立面 〔図〕

四七 中の御茶屋客殿西立面 〔図〕

四八 同 北立面 〔図〕

四九 同 断面東西 〔図〕

五〇 同 同 南北断面 〔図〕

五一 同 同 一ノ間床及棚

五二 同 同 霞棚

五三 同 同 一ノ間

五四 同 同 二ノ間内部

五五 同 同 四季の間 北が側襖

五六 同 客殿 鯉繪杉戸

五七 同 客殿 祇園鉾繪杉戸

五八 同 客殿 船鉾繪杉戸

書院縁座敷より楽只軒に通ずる所に引違ひ杉戸あり、表裏共に祇園祭の鉾を絵けり、表は山鉾、放下鉾、裏は船鉾にて住吉具慶筆といふ。

五九 同 客殿内佛の間 仏壇

六〇 同 同 内佛の間 地袋襖繪

六一 同 客殿内ぼう佛の間 地袋襖繪

六二 同 同 内佛 地袋襖繪

六三 同 同 内佛 地袋襖繪

六四 同 同 附玉水欄間摺形 〔図〕

内仏の間仏壇上部に玉水の欄間あり、教寄者の間に称せらる。此裏面天井には巧妙なる空気抜きありて香煙

を吸引す。仏壇建具は今存せず。下部地袋には当時の名匠が描きたりと思はるゝ扇面四枚を貼れる襖あり。また西側壁面に傀儡師を描きたる浮世絵風の貼付あり、図は幅三尺長六尺のものなれども上部絵なき所を除き主要部のみを撮影したり。

六五 中の御茶屋 客殿 前苑

六六 同 客殿前苑 瀧

六七 同 客殿 東側前苑

左端に小瀑布あり、水は石橋の下を流れて右方に落つ、南方すこしく展けて遙かに雲母坂の翠色を見る。左端の瀧より苑は左に折れて、東背林丘寺に接する所、石を組み崖をなし、階をきざみて林丘寺に至る。

六八 同 楽只軒 南立面

六九 同 中の御茶屋楽只軒平面 [図]

七〇 同 中の御茶屋楽只前苑 石橋

七一 同 同 石燈籠

七二 同 下ノ御茶屋配置 [図]

七三 同 同 中門

御門は中門と共に欄間透し彫勝れたり。中門左方には修学十境に謳はれたる菩提樹あり。

七四 同 南側(蔵六庵)

中島を過ぎて蔵六庵の南側にいづ、棟を仰げば後水尾天皇御宸翰の御銘額を見る。

七五 同 下の御茶屋 南側(壽月観)

壽月観は上段ある書院にて、其南縁に後水尾天皇御宸

翰の御銘額を掲ぐ。

七六 同 東側(蔵六庵)

七七 同 下の御茶屋 東側(壽月観)

七八 同 下の御茶屋 蔵六庵南側

北側には御中ノ口とも称すべき出入口ある外何等云ふべきなし、此側に勝手其他の附属舎ありしと考へらる。

七九 同 裏門口より建物を見る

八〇 同 壽月観 蔵六庵 平面 [図]

八一 同 楽只軒 東立面 [図]

八二 同 楽只軒 西立面 [図]

八三 同 杉戸繪

八四 同 杉戸金具

蔵六庵御水屋の入口に杉戸開ありて表に瓢の花、裏に松を描く、筆者を詳にせず、菊花の金具を附せり、金具は其ツマミを左右に動かして開閉す、大さ略原寸とす。

八五 同 御苑 石燈籠

八六 同 御苑 石燈籠

左右に配せるものゝ左図は鯉口また袖形燈籠といふ、高さ三尺八寸笠石の幅二尺七寸×二尺一寸、蔵六庵下の池庭中島にあり。右は屋形燈籠にして高さ五尺一寸五分、笠石二尺四寸、蔵六庵前平庭の奥にあり。上下に配せるものゝ上図は朝鮮石にして蔵六庵の池辺にあり、高さ約三尺笠石二尺五寸とす、其竿石には自然石を用ひたり、下図は塔婆形、御苑西南隅にありて高さ

二尺ばかりなり。

八七 同 御門欄間透シ摺形 [図]

(上) 下ノ御茶屋正門

(中) 同 中門

(下) 上ノ御茶屋正門

※私が所持している原本の修学院離宮御写真及実測図は一部写真と実測図が欠落しています。それで作成した復刻版です。ご了承ください。